

2024年度 事業報告書

昨今、地震や豪雨などの自然災害が相次ぎ、甚大な被害が発生しています。被災地では今なお、多くの方々が厳しい避難生活を余儀なくされています。一方、2024年夏に開催されたパリオリンピックでは、連日、日本代表の活躍が伝えられ、スポーツを通じて多くの人々に希望と感動が届けられました。

当財団の2024年度事業活動では、財団創設者 安藤百福の「食とスポーツは健康を支える両輪である」という理念を実現すべく、スポーツや体験学習の機会の更なる創出を図るなど、コロナ禍以降の子どもたちの心身の健康悪化などの社会課題に取り組みました。

また、食文化振興事業では、第2回調査レポート「Nourishing Wellbeing」により、改めて「食」と「ウェルビーイング」の強い関係性を立証し、食を通じたウェルビーイングの実現へ向けた提言を行いました。

2024年度に実施した事業につきまして、次のとおりご報告します。

<公益目的事業>

- (1) 公1. スポーツ支援事業
- (2) 公2. 自然体験活動支援事業
- (3) 公3. 食文化振興事業
- (4) 公4. 発明記念館運営事業

<収益事業等>

- (1) 収1. 施設賃貸および物販等の業務受託

<公益目的事業>

■公1. スポーツ支援事業

「食とスポーツは健康を支える両輪である」という基本理念のもと、陸上競技やテニス、バスケットボールなど、スポーツを幅広く支援しています。スポーツを通じて、子どもたちの夢を応援し、青少年の健全な心身の育成を図ります。

1. 「第40回全国小学生陸上競技交流大会」の事業後援

「未来ある子どもたちにあらゆるスポーツの基本である正しい走法を学ばせたい」という公益財団法人日本陸上競技連盟の考えに賛同し、走る楽しさ、仲間とふれあう喜びを広めることを目的に、1985年から全国の小学生を対象とする小学生陸上競技大会を支援しています。

2024年度は、地方大会も含め、約32,000人の選手や関係者が参加し、仲間たちと交流を深めることができました。記念すべき40回目を迎えた全国大会は、東京オリンピックの舞台・国立競技場で開催され、パリオリンピックで活躍した北口榛花選手や田中希実選手など、憧れのオリンピックピアニがプレゼンターを務め、「めざせ、自分新記録」をテーマに思い出に残る大会の創出に努めました。

また、「記録」に対する興味、喜び、自信、目標を感じてほしい、本大会への出場を思い出に刻み、活動のモチベーションや将来への希望を持ってほしいという願いから、「My Record」を実施しました。これは、地方大会に出場した全小学生の記録を日本陸上競技連盟のウェブサイトに掲載するものです。順位付けや競争による小学生期の過度なトレーニングや精神的負担の増長を防

ぐため、相対的な順位表にはなりますが「ランキング」とはせず、「My Record」としてしています。

小学生を指導する陸上競技指導者の研鑽を図ることを目的に、大会当日（競技会終了後）に指導者交流会を開催しました。指導者同士の交流や、日本陸連の指導者養成の方向性を共有する場として、各都道府県の指導者の交流、情報・意見交換の貴重な機会となりました。

【地方大会】 開催日程：2024年6月～7月 参加者数：31,220人

【全国大会】 開催日程：2024年9月21日(土)～23日(月) 参加者数：650人
競技会、フレンドシップパーティなど交流会、指導者研修会、指導者交流会

【事業費】 152,909,067円

2. 少年少女陸上競技指導者表彰「安藤百福記念章」表彰

子どもたちの健全な心身の育成には、優れた指導者の存在が不可欠であるとの考えから、小学生の指導者を顕彰する少年少女陸上競技指導者表彰「安藤百福記念章」を、各都道府県から選出された指導者47名に贈呈し、今後の一層の活躍を期待して表彰しました。

3. 「安藤財団グローバルチャレンジプロジェクト」支援事業

当財団と公益財団法人日本陸上競技連盟は、若手アスリートの海外挑戦、武者修行を支援する「安藤財団グローバルチャレンジプロジェクト」を2015年9月にスタートしました。世界のトップ選手が集うトレーニング環境に飛び込み、現地のコーチに指導を乞い、切磋琢磨しながら、トップアスリートとして求められる資質を育成するもので、国際大会におけるメダリスト誕生をサポートするものです。これまで、延べ85名の若手アスリートを支援しました。

2019年、2020年に本プロジェクトを活用して、チェコで単独武者修行した北口榛花選手が、パリオリンピックにおいて陸上女子フィールド種目における日本人初の金メダルを獲得するなど、大きな成果を上げています。

【2024年度支援対象者】 12名

氏名	年齢	種目	2024年度 活動期間	日数	活動拠点
柳井 綾音 (立命館大学)	20 女	競歩	5月7日～5月20日	14	フランス スペイン
巖 優作 (筑波大学)	22 男	やり投	8月15日～9月4日 3月3日～3月24日	43	フィンランド 南アフリカ
木梨 嘉紀 (筑波大学 大学院)	23 男	短距離	1月20日～2月16日	28	ドイツ、フランス (欧州転戦)
阿部 竜希 (順天堂大学)	21 男	110mH	3月9日～3月30日	22	オーストラリア
本田 怜 (順天堂大学 大学院)	23 女	100mH	3月4日～3月25日	22	ニュージーランド オーストラリア
清川 裕哉 (東海大学)	21 男	やり投	1月21日～2月28日	39	フィンランド
山口 智規 (早稲田大学)	21 男	長距離	2月4日～3月31日	56	オーストラリア
澤向 美樹 (北海道幕別清陵高校)	18 女	ハンマー投	2月1日～2月16日	16	ドイツ
柳田 大輝 (東洋大学)	21 男	短距離	2月20日～3月16日	25	オーストラリア
重谷 大樹 (東洋大学)	22 男	短距離	2月20日～3月30日	39	オーストラリア

氏名	年齢	種目	2024年度活動期間	日数	活動拠点
西 徹朗 (早稲田大学)	21 男	110mH	2月7日～2月23日	17	オーストラリア ニュージーランド
執行 大地 (筑波大学 大学院)	23 男	ハンマー投	2月1日～3月3日	31	ドイツ

【事業費】 15,115,935円

4. スポーツ全般におけるジュニアアスリート育成の後援事業

本事業は、青少年の健全な心身の育成を図るという目的のもと、公益財団法人日本オリンピック委員会に加盟する競技団体を対象とし、全国的な組織またはそれに準ずる団体の活動を通じて、ジュニアアスリート育成を支援します。

(1) 公益財団法人日本テニス協会主催「安藤財団グローバルチャレンジ Jr.テニス」

当財団と公益財団法人日本テニス協会は、世界で活躍できる将来のスーパースター候補の発掘と、早期教育を目的に、47都道府県から11歳の男女1名ずつと、海外選手を全国で開催するキャンプに招聘する「安藤財団グローバルチャレンジ Jr.テニス」を、2023年度からスタートしました。国内トップレベルの選手や海外選手との交流を通し、刺激を受けつつ多様性を養っています。レジェンドコーチによる少人数指導や、「トッププレーヤーが持つマインド」「栄養、睡眠、体力などのコンディショニング」「表現力」などを学ぶ研修会「チャンピオン教育」を開催し、タレント発掘と育成を図ります。

<国内キャンプ>

キャンプ名	開催場所	日程	選手数
江坂キャンプ	江坂テニスセンター	4月27日～29日	30名
三木キャンプ	ブルボンビーンズドーム	6月21日～23日	46名
NTC キャンプ	ナショナルトレーニングセンター	9月14日～16日	24名

<海外遠征>

遠征先	大会名	日程	選手数
アメリカ	IMG ACADEMY	11月22日～12月7日	6名
フランス	Les Petits As	1月16日～25日	1名

*海外遠征には、男女コーチ、トレーナー、栄養士等が引率者として帯同しています。

【事業費】 33,167,303円

(2) 公益財団法人日本バスケットボール協会主催「U18 リーグバスケットボール競技大会」

U18世代バスケットボール界では、高校での部活動、クラブチームでの活動に区別されており、相互に交流がないことが育成、普及面での課題となっていました。

部活動・クラブなどの垣根を超えたリーグ戦文化の定着と、若年層の育成強化、裾野の開拓を目的に、当財団は公益財団法人日本バスケットボール協会と連携し、2022年度から新たなリーグ戦を創設しました。本リーグは、高校生世代のチャレンジ精神を沸き立たせ、日本のバスケットボール界の底上げを図るものです。

リーグ戦文化のポイントは、公式戦の試合数が確保され、多くの選手への出場機会を得られることにあります。また、実力が拮抗するチーム同士の対戦となるため、対戦相手の研究

や、それを踏まえた戦略・戦術の立案などが必要となり、毎日の練習の質が向上します。選手、指導者からは競技力向上に繋がっていることや、審判員、大会運営者の育成にも貢献していると評価されています。

2024年度は、実力が拮抗する男女8校によるトップリーグと、新たに北海道、九州の2地域を追加した全9つのブロックリーグを支援しました。また、6ブロックにおいて、Bリーグユースチームが参戦、東海ブロックでは名古屋ダイヤモンドドルフィンズU18ユースが優勝する等、垣根を超え、相互に切磋琢磨する姿が見られました。

将来的には「トップ」「ブロック」に続き、普及を担う「都道府県」リーグを設置し、リーグ戦の結果が上位リーグにつながる入替戦の導入など、競技レベルの強化、底上げにも貢献します。

【参加者数】

区分	リーグ数	チーム数	試合数	選手チームスタッフ	審判・競技運営スタッフ	合計人数	試合数	参加者数
トップ	1	16	56	320名	616名	936名	432	7,512名
ブロック	9	122	376	2,440名	4,136名	6,576名		

*ブロックリーグ開催地域：北海道、東北、関東、北信越、東海、近畿、中国、四国、九州

*全国各地で開催されたトップリーグには、19,500名の観戦あり

【事業費】 440,000,000円

■公2. 自然体験活動支援事業

「自然とのふれあいが子どもたちの創造力を豊かにする」という安藤百福の考えのもと、財団設立以来、青少年の健全な心身の育成を目的に、子どもたちの「協調性」や「自活力」を育む自然体験活動の更なる普及と活性化に取り組んできました。

1. 「第23回トム・ソーヤースクール企画コンテスト」の実施

子どもたちの創造力やチャレンジ精神を育む、独創性に富んだ自然体験活動を募集し、優れた企画の実施を支援、表彰する「トム・ソーヤースクール企画コンテスト」は、2002年にスタートしました。

2024年度は、163件の応募がありました。ユニークで創造的なプログラムが数多く、自然への理解を深めるとともに高い教育効果を期待できる活動や、子どもたちが達成感を得られる自然体験活動が特長として挙げられます。その中から、51団体を選考し、実施支援金を贈呈しました。活動に参加した子どもの数は20,000人にのぼります。

さらに、その活動報告書を審査した結果、学校部門の最優秀賞となる「文部科学大臣賞」には、「花とみどり課」「テクノロジー課」など9つの課からなる研究所を学校内に立ち上げ、学校と地域コミュニティの強い連携のもと、子どもたちの探究心と郷土愛を育む幅広い活動を展開した庄内学園が、一般部門の最優秀賞となる「安藤百福賞」には、能登半島地震、豪雨と度重なる災害に見舞われながらも子どもたちに寄り添った活動を続け、「揚げ浜式塩づくり」の作業体験など地域文化に根差した自然体験を通して伝統と希望をつなぐ活動を実施した珠洲市立大谷小中学校PTAが受賞するなど、14団体を表彰しました。

2月1日、安藤百福発明記念館 横浜において表彰式を開催し、表彰団体より活動報告を発表するとともに、俳優の石丸謙二郎氏をお招きし、「書を持ち野にしよう」と題した講演会も行いまし

た。また、表彰団体の活動報告をホームページ「自然体験.com」において広く公開しました。

2025 年度より、本コンテストを「安藤財団 自然体験企画コンテスト」と趣旨が分かりやすい名称に変更し、更なる自然体験活動の活性化を図ります。

【後 援】 文部科学省、横浜市、横浜市教育委員会

【表彰団体】

[学校部門]

◆ 文部科学大臣賞（副賞：100 万円）

団体名：庄内学園（静岡県）

企画名：【庄内未来研究所】一庄内地区を 20 年後も元気な地域にしようー

◆ 優秀賞（副賞：50 万円）

団体名：延岡市立上南方小中学校（宮崎県）

企画名：Nature to Kamiminamikata ～上南方につながる自然満喫体験～
「自分発⇒友だち経由⇒自分着」の学び

[一般部門]

◆ 安藤百福賞（副賞：100 万円）

団体名：珠洲市立大谷小中学校 PTA（石川県）

企画名：OHTANI PRIDE ～震災を乗り越えてつなげる伝統～

◆ 優秀賞（副賞：各 50 万円）

・団体名：一般社団法人 Telacoya921 Telacoya 旅する小学校（神奈川県）

企画名：葉山と沖縄をつなぐサバニプロジェクト

・団体名：芦生山の家（京都府）

企画名：由良川源流、芦生の森に挑む冒険学校

[学校部門・一般部門共通]

◆ 推奨モデル特別賞（副賞：30 万円）

プランニングや指導の方法、計画を実施に移す過程などが、多くの学校や団体の参考モデルになると認められた企画として、1 団体に贈呈しました。

◆ トム・ソーヤー奨励賞（副賞：各 20 万円）

企画内容がユニークで他団体への刺激や参考となり、更なる飛躍が期待できる企画として、2 団体に贈呈しました。

◆ 努力賞（副賞：各 10 万円）

学校部門 3 団体、一般部門 3 団体、計 6 団体に贈呈しました。

【表彰式】 2025 年 2 月 1 日(土) 安藤百福発明記念館 横浜

講演会：石丸 謙二郎 氏（俳優）

テーマ：「書を持ち野にしよう」

【事業費】 21,469,275 円

2. 安藤百福センター事業

当財団は、2010 年 5 月、安藤百福 生誕 100 年の記念事業として、長野県小諸市に、「安藤百福記念 アウトドア アクティビティセンター」を設立しました。自然体験活動への興味を喚起し、自然体験活動を活性化する施策の実施、座学やフィールドを活用した自然体験講座を開催したほか、自然体験の基本となる「歩く旅」の普及につながる講座のウェイトを高めています。

2022 年 6 月、特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会は、ロングトレイルの普及のため、

日本列島を南から北まで一本道でつなぐ全長約 1 万キロの山旅「JAPAN TRAIL®～Hiking Nippon～」を提唱。「そこに立てば日本が見えてくる」をテーマに、この国の豊かな自然と歴史・文化を再発見できる、新しい歩く旅の道を記者発表しました。この取り組みを通して、①心身の健康と自然環境の保護意識の向上、②子どもたちの好奇心を育む自然体験活動の機会の提供、③地域観光への再興が期待されるインバウンド需要の対応、④SDGs への関心を高めることなどを図ります。

自然の中を歩くことは、体力、好奇心を育み、環境学習にもつながる青少年教育の有効なツールと考え、当財団は「JAPAN TRAIL®～Hiking Nippon～」構想を支援しています。

(1) 自然体験活動振興事業

① 人材育成のための研修会、講座、シンポジウム等の開催

公益社団法人日本山岳ガイド協会主催の危急時対応技術講習会などの安全管理に関する研修会や日本山岳会主催の登山教室指導者養成講習会をはじめ、大学や民間のアウトドア活動団体が安藤百福センターを利用して、各種研修会を実施

利用団体数：71 団体（1,899 名、延べ 2,425 名）

② 自然体験活動への興味を喚起し、自然体験活動を活性化する施策の実施

自然を楽しむ講座や体験、安藤百福センターの野外研修フィールドである浅間・八ヶ岳パノラマトレイルにおいて、以下の講座などを主催

- ・ロングトレイルハイカー入門講座（全 7 回：延べ 100 名参加）
- ・大人のトレイル歩き旅講座（全 6 回開催・延べ 111 名参加）
- ・子どもクライミング教室（全 8 回予定：内 7 回開催・延べ 160 名参加）
- ・防災講習会（全 3 回開催・延べ 95 名参加）

(2) ロングトレイルの普及と安全対策事業への支援

子どもたちの自然体験の主な活動場所は、山、川、海や身近な森林、キャンプ場が中心であり、どのフィールドでも「歩く」ことが基本となります。「アウトドアで歩く文化」の醸成を図り、子どもたちが安心して自然体験が楽しめるよう安全対策事業を支援しました。

① 第 2 回 JAPAN TRAIL FORUM 開催支援

開催日：2025 年 1 月 28 日(火) 東京 池袋サンシャインシティ

主 催：特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会

参加者：トレイル関係者、国、自治体、メディア、観光事業者等約 500 名が参加

内 容：「山旅の道とは何か、ゆしみとは何か」をテーマに、ロングトレイルの意義や役割について議論や提案を行うとともに、展示ブースにて全国のトレイル運営団体の活動を紹介

② JAPAN TRAIL 提唱における広報活動支援

③ ロングトレイルの情報収集と発信、全国の運営団体との交流

【事業費】 192,518,648 円

3. 自然体験活動支援ホームページ「自然体験.com」の運営

自然体験活動に関する情報や専門家によるノウハウを満載しているホームページ「自然体験.com」は、学校完全週 5 日制が施行された 2002 年にスタートしました。当財団では、「自然体験.com」を通じて、保護者や指導に携わる方々へ自然体験活動に関する情報を提供し、子どもたちの「創造力」や「自活力」を育む自然体験活動の輪を広げる事業を行っています。

また、「トム・ソーヤースクール企画コンテスト」の募集や、支援団体の活動状況を伝える速報レポート、活動報告書も掲載しました。文部科学大臣賞、安藤百福賞など受賞した団体の活動報告の動画を公開し、他団体の参考としています。

【U R L】 <http://www.shizen-taiken.com>

【事業費】 8,905,240 円

■公3. 食文化振興事業

1. 食創会「第29回安藤百福賞」表彰事業

食創会は、1996年、「食創為世（食を創り世の為につくす）」という安藤百福の理念に基づき、新しい食の創造を推し進め、食品産業の発展に貢献することを目的に創設されました。当財団では、「食創会」を主宰し、「安藤百福賞」の表彰を行っています。

大賞や優秀賞のほか、発明発見奨励賞は、大学などに所属する若手研究者や中小企業の開発者を表彰対象としています。

2024年度「第29回安藤百福賞」大賞には、フレキシブルデバイスを用いた生体計測センサの開発を研究した大阪大学 産業科学研究所 関谷 毅 教授が受賞しました。この技術を食科学に応用することで、味覚やおいしさの研究、さらには心身の健康を支える食品の研究に新たな可能性をもたらすと期待されています。

大賞のほか、優秀賞2件、発明発見奨励賞3件を選考、表彰しました。

【後援】 文部科学省、農林水産省

【表彰者】

● 大賞（副賞：1,000万円）

関谷 毅 氏 大阪大学 産業科学研究所 教授

「フレキシブルデバイスを用いた生体計測センサの開発
～食品と生体計測の融合で実現するウェルネス～」

● 優秀賞（副賞：各200万円）

・ 國澤 純 氏 国立研究開発法人 医薬基盤・健康・栄養研究所 医薬基盤研究所 副所長
ヘルス・メディカル微生物研究センター センター長

「腸内細菌叢統合データベースの構築と精密栄養学の基盤研究」

・ 宮本 敬久 氏 九州大学大学院 農学研究院 特任教授

「食品の腐敗防止および安全性の確保に関する研究」

● 発明発見奨励賞（副賞：各100万円）

・ 高橋 春弥 氏 京都大学大学院 農学研究科 助教

「質量分析データを応用した肥満予防に寄与する生体内因子及び食品成分の同定」

・ 豊嶋 麻里 氏 アサヒビール株式会社 マーケティング本部 開発プロジェクト部 担当課長

「世界初・本物レモンスライス入りチューハイ量産販売への挑戦」

・ 古澤 之裕 氏 富山県立大学 准教授

「食物繊維による免疫調節の研究」

【表彰式】 2025年3月11日(火) ホテルニューオータニ東京

【記念講演】 関谷 毅 氏 大阪大学 産業科学研究所 教授

【事業費】 57,759,957 円

2. 食科学の進展に寄与する学生への「安藤百福 Scholarship」奨学支援事業

日本国内では、経済的理由で就学が困難な学生を支援するため、さまざまな奨学金制度がありますが、大学院生に特化した奨学金制度は十分ではなく、アルバイトなどで学費や生活費を工面している学生が少なくありません。コロナ禍において、この問題は特に顕著となりました。

当財団は、食科学のイノベーションをコロナ禍で停滞させてはならないとの思いから、日清食品と共同で「日清食品・安藤百福 Scholarship」奨学支援事業を、2021年よりスタートしました。

今般、地球温暖化、国際紛争、物価高などの問題のほか、健康やウェルビーイングへの関心の高まりなど、食を取り巻く環境はますます多様化しています。安藤百福の掲げた「食創為世」の理念のもと、食のイノベーションを一層推進するべく、2024年度、食科学進展に寄与する大学院生100名に、年額100万円の奨学金を給付し、食文化の向上、振興を担う将来の人材の育成を図りました。

【事業費】 100,000,000円

3. 「食分野における主観的ウェルビーイング指標開発」調査研究事業

「主観的ウェルビーイング」とは、心身の健康と社会的な健康を意味する概念で、満足した生活を送ることができている、持続的に幸福な状態を言います。現在、各国政府や国際機関において国民等の「ウェルビーイング」を測定し政策立案に活用するなど、取組が加速しています。しかし、食分野においては「主観的ウェルビーイング」について基礎となるデータの蓄積が乏しく、革新のための知見が足りない状況です。

当財団は、2021年11月、公益財団法人 Well-being for Planet Earth と連携し、食文化の向上に資する研究や開発につながる「食分野における主観的ウェルビーイング指標開発」調査研究事業を創設しました。食は人間の命・健康を支えるものであることは言うまでもありませんが、食と主観的ウェルビーイングの関係は明らかになっていませんでした。

2022年、世界最大の世論調査を行う米国ギャラップ社に調査を委託し、世界142か国での調査を行い、2023年10月、「食」と「ウェルビーイング」の関係性を明らかにした世界初の研究調査「Recipes for Wellbeing Report」を公表しました。

2025年1月には、第2回調査レポートとなる「Nourishing Wellbeing」を公表しました。

第1回調査と比較し、食の満足度を表す「Food Wellbeing Index」の数値は、世界的に若干低下しました。今回の調査では、生活の質を示す QOL 指標と Food Wellbeing Index の関係性についても分析し、食の満足度は、人生の評価や生活における肯定的な体験、困ったときに頼れる人がいるか、コミュニティへの愛着等の指標と強い関係がみられ、改めて、食とウェルビーイングの間には強い関係性があることを立証しました。

第2回調査は、前回以上に世界的に反響がありました。アメリカの CNN をはじめとした海外メディアに取り上げられるとともに、国連が発行する World Happiness Report 2025 でも調査の内容が活用され、調査や財団のプレゼンスを高めることができました。

【事業費】 129,436,623円

■公4. 発明記念館運営事業

「人間にとって一番大事なものは創造力であり、発明・発見こそが歴史を動かす」という安藤百福の考えに基づき、世界の食文化を変えたインスタントラーメンの誕生から、産業として世界に発展していった歴史を通じて、未来を担う子どもたちに発明・発見の大切さを伝え、「ベンチャーマインド」や

「クリエイティブシンキング＝創造的思考」を育み、青少年の健全な心身の育成に寄与することが、この事業の目的です。

2024年度は、学校教育での利用促進が進むとともに、インバウンドによる来館者増が進みました。2024年度来館者数は、池田記念館 75.8 万人、横浜記念館 103 万人、両館あわせて 178.8 万人と、コロナ禍前（202.7 万人）と比較し 88%程度の回復となりました。

学校教育や海外インバウンドの更なる利用拡大を図り、発明・発見の大切さを伝え、発明心の涵養を促進します。

1. 安藤百福発明記念館 大阪池田（池田記念館）

池田記念館は、1999年11月、インスタントラーメン発祥の地・大阪府池田市に開館しました。

2024年7月、安藤百福発明記念館名誉館長である宇宙飛行士 野口 聡一さんによる、「野口さん直伝！宇宙飛行士流チームワーク術」というテーマの子ども向けセミナーを開催、ワークショップを通じて、チームワークの大切さ、素晴らしさを、現地参加とweb配信を含めると1,000名以上の子ども達に伝え、大変好評を博しました。

【施設概要】 所在地：大阪府池田市満寿美町8番25号

敷地面積：4,477 m²、延床面積：3,423 m²

【開館年月】 1999年11月 累計来館者数 12,059,000人

<2024年度実績>

【開館日数】 305日

【来館者数】 758,000人

【体験者数】 チキンラーメンファクトリー 54,600人

マイカップヌードルファクトリー 541,000食

【学校教育】 1,002校 48,900人

【事業費】 198,922,087円

2. 安藤百福発明記念館 横浜（横浜記念館）

横浜記念館は、2011年9月、安藤百福の思いを世界に発信しようと、国際都市・横浜みなとみらいに開館しました。

【施設概要】 所在地：横浜市中区新港2丁目3番4号

敷地面積：4,000 m²、延床面積：9,883 m²

【開館年月】 2011年9月 累計来館者数 12,255,000人

<2024年度実績>

【開館日数】 287日 *空調換気設備更新のため2025年1月臨時休館

【来館者数】 1,030,000人

【体験者数】 チキンラーメンファクトリー 84,100人

マイカップヌードルファクトリー 715,000食

カップヌードルパーク 79,200人

ワールド麺ロード 337,000食

【学校教育】 1,202校 56,000人

【事業費】 584,410,239円

<収益事業等>

■施設賃貸および物販の業務受託

当財団が所有する発明記念館（池田記念館、横浜記念館）の一部を、物販コーナーとして賃貸しました。

【賃貸面積】 ① 池田記念館 324 m²（館全体の延床面積に占める割合：約 9%）

② 横浜記念館 115 m²（館全体の延床面積に占める割合：約 1%）

【事業費】 10,496,886 円

以上